

国語辞書における「板額」の語釈に対する疑義

Some remarks on the definitions of the common noun “HANGAKU” in the Japanese language dictionaries

高橋 永行

Nagayuki Takahasi

Abstract

This paper examines whether the definitions of the common noun “HANGAKU” in the Japanese language dictionaries are appropriate. The Chinese characters for “HANGAKU” are “坂額” when we use the word as a proper noun that refers to a historic personage, and they are “板額” when we use it as a common noun. It is inappropriate to say that this word as a common noun refers to stout ugly women and has a sneering connotation. The word has a more objective meaning which does not contain any affective connotation. It means “a woman who does not flinch from difficulties and acts positively in a dignified manner.” In addition, it is preferable that the definition of the meaning should refer to the related word “TOMOEHANGAKU(巴板額)” or it should be set up as another entry.

キーワード：辞書記述、親愛・悪態表現、からかい・揶揄表現、お転婆、板額

はじめに

鎌倉時代初期、越後国の城九郎資国の娘に、「坂額」と称された女性がいた。『吾妻鏡』によれば、1201(建仁元)年、甥の資盛が源頼家に抗して越後で挙兵した際、自ら陣頭に立って奮戦したが、敵方に捕らえられ、後に甲斐国の浅利義遠の妻となり、甲斐国でその生涯を終えたという。坂額の生誕地は現在の新潟県北蒲原郡中条町、嫁ぎ先と没地は現在の山梨県東八代郡境川村である。この両町村は、坂額を縁にして1996年友好町村となった。中条町では2001年10月に、「板額御前奮戦800年記念イベント」が行われ、境川村からも代表が参加して、交流を深めたという。また2003年にも「三代目板額御前コンテスト」(いわゆるミスコンテスト)が公式行事として実施されている。

江戸時代には、坂額は木曾義仲の愛妾巴御前とともに、怪力・勇猛の女性として説話化され、浄瑠璃・歌舞伎芝居上の人物になった。ところが、『吾妻鏡』などの歴史書では「坂額」と表記されていたが、文学作品では「板額」と表記された。また、『吾妻鏡』では「美人」とされていたのに対し、のちの伝承では「醜女」の代名詞となり、近現代の国語辞書の多くは「体格が逞しく、容貌の醜い女をあざけってということば」などのように、女性を揶揄する一般語として語義説明を施している。ただしその意味で使用された文献での用例を挙げる辞書はない。また一部の地方では、「ハンガク」は、「お転婆」に関連する意味を持つ方言として使われている。

国語辞書において「ハンガク」の漢字表記は人名であっても一般語であっても「板額」だけが示され、一般語にあっては典拠を示すことなく「女性を揶揄する表現」と解説される。

本稿では、一般語「ハンガク」はどのように扱うべきか、資料に基づき再検討する目的で記述する。

1 辞書記述

国語辞書名	人名	一般語
1862 倭訓栞		はんがく 坂額と書り、越後の城資盛か叔母よく射よく戦ふ虜にあひて後鎌倉に至りぬ阿佐利義遠請て妻とす、
1929 大日本国語辞典 富山房	無し	(平資盛の姨母板額を誤りて醜婦としたる伝説に基づく) 体格のたくましく容貌のみにくき女を嘲りていふ語。
1935 辞苑 博文館	一	二 体格逞しく醜い女の嘲称。
1936 大辞典 平凡社	一	二 平資盛姨母板額を醜婦なりとしたる伝説より出でたる語。体格のたくましく容貌のみにくき女を嘲りていふ語。
1956 新訂大言海 富山房	無し	(平資盛ノ姨母板額ノ、醜婦ナリキト云フ伝説ヨリ出タル語) 体格、強健ニシテ、容色ノ善カラザル女ヲ嘲リテ云フ語。又、カルハズミナル女ノ称。オハンガク。オテンバ。(静岡)
1959 新言海 日本書院	無し	(平資盛の姨母板額で、醜婦であったという伝説から出た語) 体格が強健で、容色のみにくい女を嘲っている語。また、かるはずみな女の称。おはんがく。おてんば。
1973 広辞林五版 三省堂		一→並木宗輔の浄瑠璃「和田合戦女舞鶴」に脚色。 二 からだがたくましく、顔の醜い女をいう語。
1981 国語大辞典 小学館	一	二(一の伝説から)体格がたくましく、容貌の醜い女を罵っている語。
1983 広辞苑三～五 岩波書店	一	二 体格がたくましくて顔の醜い女をあざけっている語。
1988 大辞林 三省堂	〇	無し
1989 日本語大辞典 講談社	一	二(転じて)男まさりの醜い女の称。
1989 言泉 小学館	一	二(一の伝説から)体格がたくましく、容貌の醜い女を罵っている語。
1998 大辞泉増補 小学館	〇	無し
2001 日本国語大辞典 二版 小学館	一	二(一の伝説から)体格がたくましく、容貌の醜い女をあざけっている語。方言 1. おてんば。2. でしゃばり。3. 意地悪女。4. 浮気な娘。

『倭訓栞』は厳密には国語辞書ではないが、参考例として掲げた。表記は「坂額」である。人名としての説明のみである。以降の国語辞書の漢字表記はすべて「板額」である。

大槻文彦の『言海』には見出しがなく、また収載語数が7.8万前後のいわゆる小型の辞書にも見出し語として立てられていない。『大辞林』と『大辞泉』は人名としての説明だけを挙げる。

一般語としての説明では、『大言海』と『新言海』が「かるはずみな女・お転婆」という解説を加え、『日本国語大辞典』は方言欄を設けてそれを示している。

解説部の全体的傾向として次のことがいえる。1929『大日本国語辞典』、1936『大辞典』、1956『大言海』、1959『新言海』は「板額を醜婦であったとした伝説」により一般語化したという注記を施しているが、その伝説の典拠は何か示していない。1981『国語大辞典』、1989『言泉』、2001『日本国語大辞典』は一様に「一の伝説から」と示し、1989『日本語大辞典』は「(一から)転じて」とし、「伝説」の内容については触れていない。『吾妻鏡』には後述するように、板額を醜婦とする記述はなされていない。すべての辞書において一般語が成立した由来についての適切な記述はなされていないとはいえないようである。

次に国語辞書以外の辞書として、古語辞典・歴史辞典・百科事典における記述を示す。歴史上の人物として説明されている部分は省略し、「ハンガク」の漢字表記と注記の部分だけを示す。(〈 〉内は筆者注)

歴史・百科事典名	表記及び注記
1909 大日本人名辞典 六版 経済雑誌社	板額 〈「大日本史」から引用〉
1938 日本人名大事典 平凡社	板額
1977 新潟県大百科事典 新潟日報事業社	板額 板額という呼称は、住地の奥山荘飯角(北蒲原郡中条町)を音読のではないかと思われる。
1988 日本大百科全書 小学館	坂額 板額とも書く。
1990 国史大辞典 吉川弘文館	板額 『吾妻鑑』では「坂額御前」。
1990 鎌倉・室町人名 事典コンパクト版 新 人物往来社	板額 正しくは「飯角(いはずみ)御前」。
1994 角川古語大辞典 角川書店	板額 〈文献例「東鑑・建仁元・6.28」の記事を引用。ただし表記を「板額」とする。文学作品から「すまふの祝言・2」、「鎌倉尼将軍・1」を引用〉
2001 日本歴史大辞典 小学館	板額 坂額とも書く。

漢字表記を「坂額」としているものは、『日本大百科全書』だけである。注記にて「板額とも書く」とし、『日本歴史大辞典』はその逆で注記に「坂額」を示す。『角川古語大辞典』は『吾妻鏡』の用例を引くが、「板額」と表記し、『吾妻鏡』は後述するように「坂額」と表しているの、これは用例表示として適切かどうか疑問である。『新潟県大百科事典』と『鎌

倉・室町人名事典』は「飯角」という表記も示す。これは生誕地の地名が「飯角（いいずみ）」であることから、それを音読みし、伝え聞いた者が誤記したという推測の元に示したものであるが、「角」に「ガク」という読みを示す古辞書はないこと、及び「坂額」という漢字表記には名付けた者の何らかの命名意図が含まれていると考えられることから、これも根拠の見あたらない不適切な注記であると思われる。

以上のように、各種辞書類を提示したが、次の2点が問題である。

- (1) 初出文献の『吾妻鏡』では「坂額」と表示されているにも関わらず、人名表記を「坂額」とすることは適切かどうか。
- (2) 一般語義の由来に適切な根拠がなく、いつどのようなところで使われていたのか、つまり一般に広く使用されていたのかどうか不明のままに「女性を揶揄する表現」という説明を施すことは適切かどうか。

2 歴史史料

「坂額」が登場する現存資料は知り得る限りでは『吾妻鑑』だけである。鎌倉幕府によって13世紀末～14世紀初頭に編まれた『吾妻鏡』は、種々の史料から1180（治承四）年から約90年間の出来事をつまみ、日記の体裁をとる。『吾妻鏡』は異本が多数あるが、ここでは、『全釈吾妻鏡第三巻』（新人物往来社 1977）を文献Iとして示す。（下線部、①～⑥は筆者。以下の史料同じ。）

文献I 吾妻鏡 第十七（原漢文）

建仁元年 五月十四日 また資盛が姨母あり、これを①坂額御前と号す。女性の身たりといへども、百発百中の芸ほとほと父兄に越ゆるなり。人挙りて奇特といふ。この合戦の日、殊に兵略を施し、②童形のごとくに髪を上げしめ、腹巻を著し、矢倉の上に居て、襲ひ到るの輩を射る。これに中る者死せずといふことなし。西念が郎従また多くもつてこれがために誅せらる。時に信濃國の住人藤澤四郎清親、城の後山に廻り、高所よりよく窺ひ見て矢を發つ。その矢、件の女の左右の股を射通す。すなはち倒るるところ、清親が郎等生虜る。略

六月 二八日 丙午 藤澤四郎清親、囚人資盛が姨母(③坂額と号する女房)を相具して参上す。その疵いまだ平滅に及ばずといへども、相構へて扶け参ると云々。左金吾その体を覽るべきの由仰せらる。よつて清親相具して御所に候ず。左金吾簾中よりこれを覽る。御家人等群参市を成す。重忠・朝政・義盛・能員・義邑已下侍所に候ず。その座の中央を通り、簾下に進み居る。④この間いささかも諂ふ気なし。およそ勇力の丈夫に比ぶといへども、敢へて対揚を恥づべからざるの粧なり。⑤ただし顔色においては、ほとほと陵菌の妾に配すべしと云々。

二九日 丁未 阿佐利與一義遠主、女房をもつて申して云はく、越州の囚女すでに配所を定めらるてへれば、わざと申し預からんと欲すと云々。金吾の御返事に云はく、これ無双の朝敵たり。ほとほと望み申すの條所存あるかと云々。阿佐利重ねて申して云はく、全く殊なる所存なし。ただ同心の契約をなして壮力の男子を生み、朝廷を護り武家を扶けたてまつらんがためなりと云々。時に⑥金吾、件の女面貌よろしきに似たりといへども、心の武きを思へば、誰か愛念あらんや。しかるに義遠が所存、すでに人間の好むところにあらざる由、しきりに嘲嗟せしめたまふ。しかうしてつひにもつて免したまふ。阿佐利これを得て、甲斐國に下向すと云々。

『吾妻鏡』からは次のことがうかがえる。

- (1) 表記は「坂額」である。
- (2) ①③に「号す」とあり、これは他者による名付けである。

「号す」は「名付ける。称する。～として呼ぶ。表向きそのように言いふらす。」という意味で使われる語であるから、一方的な名付け、後世の名付けといえる。『吾妻鏡』の記事の中で義遠は「越州の囚女」、頼家（金吾）は「件の女」と呼び、坂額本人は名乗っていない。ちなみに、義経の妾静御前は文治元年十一月六日の記事で「妾女〈字静〉」と記され、「字（あざな）」と示されていることから、呼称者・被呼称者どちらも当人の名であると認識していた。

- (3) 性格は④⑥に特に描写されているように勇猛である。
- (4) 容貌については⑤⑥に描写されているように美しい顔立ちをしていた。

⑤「ただし顔色においては、ほとほと陵園の妾に配すべし」については白居易の漢詩を下地（典拠）にした表現であるとする角田文衛氏（『平家後抄―落日後の平家―』朝日新聞社 1978）の指摘がある。「陵園妾。顔色如花、命如葉。命如葉薄、将奈何。」を挙げ、「その大意は、懲罰のため帝陵の傍の舎屋に幽閉され、陵に奉仕している宮女の顔は、花のように美しいが、運命は葉のように薄い、つまり、坂額は、生虜として哀れな境遇にあるが、その容色は花のように美しい、ということ」を『吾妻鏡』の編者は述べたかったのであろう」と解説している。

⑥では、頼家が「件の女面貌よろしきに似たり」と発言しているが、続けて「心は猛々しい。それを思えば誰も（坂額に）愛情を持たないだろう。義遠の考えは、普通の人とは違う」と義遠を嘲笑している。これは、「女らしさとはどうあるべきか」という社会的規範を意識的にまたは無意識的に選んで使う場合にみられる当時の社会通念の現れである。その発言には、女らしさという品質保持に対する常識及びその品質保持を期待する社会全体の「らしさへの強制」が存在することは無視できない。それに逸脱する坂額はやはり特異な存在であったので、『吾妻鏡』の執筆者はこのエピソードを記述したのであろう。

以上(1)～(4)が『吾妻鏡』における坂額像である。しかし、寛永三(1626)年版本（国文学研究資料館蔵 表紙には「東鑑」とある）では、⑥は「但於顔色、殆可醜陵園妾」とあり、「配」が「醜」と誤写されている。『吾妻鏡』の各史料は和風変体漢文（偽漢文）で書かれているため一般の読者には読みにくい、寛永三年版はふりがな付きということで近世期に珍重されている。『振り仮名つき吾妻鏡 寛永版影印』（汲古書院 1976）の後書きによると、寛永版本は江戸時代を通じて広く流布したという。

『吾妻鏡』を参照して記述した『大日本史』には、次のようにある。

文献Ⅱ 大日本史（正徳五年叙版本 山形県立米沢女子短期大学図書館蔵）

卷一百六十一 列伝第八十八

資盛嫡名坂額、中略 ⑦坂額進至簾前、容貌麤醜、無敢屈色、中略 ⑧東鑑

⑧に参照書名を「東鑑」と記していることから、寛永三年版『吾妻鏡』を元にして記述していると考えられる。執筆者が寛永版の「醜」の文字を誤解して「容貌麤醜」としたのではないと思われる。しかし、寛永版の「但於顔色、殆可醜陵園妾」は語法上「坂額の顔が醜い」という解釈にはならず、むしろ逆に「陵園妾を醜くすべし（陵園妾を醜くするほど坂額は美しい）」と解釈すべきものであるが、『大日本史』の⑦の文言が坂額を醜女の代名詞にし

た一端を強く担っていたといえるだろう。

文献Ⅲ 甲斐名勝志 卷三 1789 (天明三) 年 萩原元克著

逸見冠者清光の子、與一義遠は、浅利郷を領す。其墓は今浅利村の南にあり。又中畑村に御前塚と云ふは、義遠の妻、坂額御前の墓かと云へり。川辺なる故に近頃流失す。

文献Ⅳ 甲斐國志 卷九十五人物部 1814 (文化十一) 年 松平定能編。

按スルニ坂額終二本州ニ在テ逝ス、上向山村大宮神田ノ中ニ坂額ノ墓ト云アリ、小黒坂ニ坂額ト云坂名アリテ、山神ノ祠ヲ祀レリ、一町畠村、姨母神ノ祠アリ、里人ハ姥神ト称シ、與一射術ノ事ヲ言伝フ、姨姥祖母ノ訓ヲ混スルハ、此処ノミニ限ラズ、是モ坂額ヲ祭レルニヤ、按ニ、⑨漢書馬廖伝、城中好広眉四方且半額ト見エタリ、蓋坂額ト云ハ一時ノ綽号ニヤ、

文献ⅢⅣは、「坂額」の没地の記録である。墓の所在と地名等を記載する。⑨はⅣの執筆者が「坂額」という名前の由来を『後漢書 馬廖伝』の、

長安語シテ曰ク、城中高髻ヲ好メバ、四方ハ高サ一尺、

城中広眉ヲ好メバ、四方ハ且ニ半額ナラントス、

城中大袖ヲ好メバ、四方ハ匹帛ヲ全クス

に求めたものである。文献Ⅰの「②童形のごとくに髪を上げしめ」という記述と『後漢書』の「広眉半額」を関連付ける。古代中国では細長の眉が普通で、眉の短いのは美人ではないとされていたようである。広眉は「広い眉」であり、太く長く額の半分を占める眉をいうのであろう。坂額の外見的特徴として、髪を上げ額が目立ち、勇猛な印象を与える太い眉を象徴的に示した綽号（渾名）と推測している。

文献Ⅴ 東八代郡誌 1914 (大正三) 年 山梨県東八代郡教育会編

板額塚 同村小黒坂小字柳原と称する官有地あり。面積一反七畝。丘陵の一隅には樹木生ひ茂りて森林をなし、東南は畑地に接し、他の三方は里道を以て囲まる。口碑に徴するに、浅利冠者義遠の妻板額の古墳なりといふ。或は云ふ、板額の墓は左右口村向山にあり。その小黒坂にあるものは、義遠の女にして板額の生む所のもの、石橋八郎信継に嫁せるものなりと。

文献Ⅴは大正時代の史料である。Ⅰ～Ⅳの江戸時代までの史料は「坂額」としているのに対し、これは「板額」と記し、3. 文学資料の表記と同じである。

「坂額が醜女であること」は、『寛永三年版吾妻鏡』において「配」を「醜」と書写されたことと、『大日本史』において「容貌羸醜」と記述されたことが、その伝説の成立した要因であろう。

3 文学資料

江戸時代には、坂額は木曾（源）義仲の愛妾巴御前とともに勇武の女性として説話化される。古浄瑠璃『すまふの祝言、はんかく女軍法、えじま姫』『江島姫生捕妻』をはじめ、『和田合戦女舞鶴』（並木宗輔作・1736(元文元)年大坂豊竹座初演)が有名である。文学作品における表記は「はんかく、板額」である。

文献VI 和田合戦女舞鶴（床本）

板額門破りの段

妻の板額。こゝぞ夫の大事ぞと涙払ふてすつくと立ちエ、情知らずの四郎殿。夫に去られたこの板額、三界に家もなければ主もなし。誰に憚り遠慮せん。男を思ふわが念力やはか通さでおくべきかと、門柱に飛びかゝり、一世一代の晴れ業、ふりしぼつたる金剛力。物見の上に藤澤四郎ヤレ地震よ雷よ。テモ恐ろしき大力無双。桑原／＼／＼とおじけ騒げど用捨なく、なほもぐわら／＼一時に、めり／＼ぐわつたり、びつしやりと、門うち破るすさまじさ。末世に伝ふ勇婦の鑑。げに板額の門破り尽きぬ話ぞ理なれ。

市若初陣の段

わが子と聞くより板額女門押し開き飛んで出て

板額人形の初演者藤井小八郎は一般の人形の倍の大きさに設えて演じ、人気を博したと伝えられている。ここに「体格がたくましい」という伝説の要因を求めることができるが、『吾妻鏡』では坂額の体格に関する記述はない。勇猛な女性であることを観客に印象づけようとする藤井小八郎の創作である。しかし、現在使われている文楽人形を見ると、板額人形の容貌を「醜女」に作られてはいない。他の女役の人形の容貌となんら劣ることのないととのった顔立ちである。その写真はインターネットにて次の homepage で閲覧できる。

<http://www.kagu.to/gallery/kaisai.html>

@プラス／ギャラリー／河原久雄写真展「文楽－人形の心－」

板額「和田合戦女舞鶴」市若初陣の段 吉田文雀

明治～昭和時代にかけては「巴板額」ということばが使用されている。

文献VII 大阪錦絵新聞 第三十二号

新町南通二丁目木原の店を^か仮りて^{かせぎ}稼をなせる
小桜といへる^{まんた}娼妓^{かおかたち}ハ^な艶容^{ごと}名の如くしほらしく
亦心の強気^{また}ハ^{たけき}壮男^{ますら}も及^{およ}はず奴の小万も
肌足^{はだし}で^{にげ}逃出^{ともえはんがく}し^{やっこ}巴板額今あらバ
降参^{こうさん}なすへし

錦絵新聞は、新聞から題材を取った錦絵というべきもので、大衆娯楽の一つとして明治時代初期に流行した。最盛期は1848（明治八）年1876（明治九）年。多くはB5大の中判で、1枚で1件の話を扱う。市井の事件を題材とし、元になった新聞記事を簡潔な文体に書き改め、ふりがな付きで印刷された。文献VIIは発行日未詳であるが、明治初期のものであろう。

文献VIII 桜の御所 1894（明治二七）年 村井玄斎作（都新聞に連載）

1 尉が島（天狗棲む）

小桜姫、女ながらも父の武勇を承けて力七十人に対し、古の巴板額を欺く勇婦なりければ、父を助けて所々の合戦に交名を顕わし、父子の勇名関東に隠れなきより、

3 若武者（魔神と見えしは）

魔神は早くも声を掛け「ヤレ待たれよ希代の勇婦、扱も御身は勇名関東に隠れなき楽岩寺家の小桜姫よな、聞きしに勝る武芸力量、古の巴板額たりともよも御身には勝るまじ、今迄の無礼御許しあれ」と顔に被りし魔神の面を取除くれば、

10 此武者振（御覧あらば）

荒次郎も姫の事は忘れ兼ねてそれと無く問いける様「人の噂に楽岩寺家の小桜姫は武勇古の巴板額に劣らぬと承る、斯る勇婦を妻にせんこと武士たるもの、本意なるが、姫には最早定まる婿君のあり候か」と申しけるに、（中略）荒次郎は聞くほどに懐かしき心地して、愈々忘れんとするも忘れ難し、「御姿を見候えば唯美しき姫上なるに、其勇力の恐ろしさは此荒次郎も舌を巻きたり」と思わず口より漏しければ、

61 御身の力（示されよ）

本丸の館にては早雲始め、嫡子氏綱・次男氏時・郎等大道寺太郎・荒木兵庫・其外一騎当千の武士ども、今こそ関東名代の勇婦小桜姫が来るよと大広間に列座なし、威儀を正して待ち居たり、此時奏者の声と諸共に其席に立出でたるは楽岩寺下総守種久、それに続て小桜姫、花の如き御姿に綾の錦の裳を曳き、北条家の諸士が星の如く居並びたる其中を怯まず臆せず悠然として通り給う、並み居る面々は唯其美しきに見惚れて茫然たり、早雲二人を側近く招き「（中略）それに就て小桜どの、御身の武勇は古の巴板額にも劣り給わぬと世の噂に聞きたるが、物の試しに我が前に於て一つ力量の程を示されよ、我等是にて見物致さん」と望みける、

文献IX みさごの鮎 第三章 泉鏡花作 1923(大正12)年

「大層嫌ふな。……其の執拗い、嫉妬深いのに、口説かれたらお前は何うする。」
 「横びんた撲りこくるだ。」
 「此は驚いた。」
 「北國一だ。山代の巴板額だよ。四斗八升の米俵、両手で二俵提げるとよ。」
 「偉い！ ……其の勢で、小春の味方をしてお遣り。」

文献X 右門捕物帖(一) 卍のいれずみ 佐々木味津三作 春陽文庫 1982(昭和57)年

日ごろの身だしなみがいいために、あんな非常時に出会っても取りみだした様子を見せないところは、さすが侍の妻女だなあとと思ってな、つい今まで感服していたんだが、考えてみりゃ、ちっとおさまりすぎているぜ。しかもだ、それほどの巴板額ごときおちつきのある侍の勇夫人が、目の前で夫の殺されるのを指くわえて見ているはずもねえじゃねえか。

文献X-2 右門捕物帖(四) 子持ちすずり 佐々木味津三作 春陽文庫 1982(昭和57)年

おこよどのとかいうご新造がいたというのに雲がくれしたんだ。しめたと思って捜していたら、ぶつりと天から矢が降ってきたんじゃねえかよ。字もうめえが、ねらい矢も人にひけをとらねえとんだ巴板額もいねえとはかぎらねえんだ。

文献Ⅶ～Ⅹには「巴板額」という語が使われているが、このことばは各国語辞書に見出し語として立てられていない。これは巴御前と板額を並び称したことばであり、「巴と板額」という2語と扱うべきかとも考えられるが、4種類の文献に使用されていることから、「巴板額」を1語と扱うべきであろう。これは比喻表現の一種で、当該(言及する)人物の外見・行動・性格・思想などの特徴を描写する愛称・渾名に近い用法である。文芸作品中の人物(「鉄仮面」「柔ちゃん」)や歴史上の人物(「小町」「西郷どん」「クレオパトラ」)などに見立てた名づけと同様の手法といえる。この「巴板額」ということばには「醜女」という外見上の意味は含まれてなく、「勇猛な女性」という内面上の意味だけを表している。むしろ、ⅦⅧのように「美人」に対して使われていることに注目したい。なお文献Ⅷ、61は『吾妻鏡』の六月二八日の記事を元にしてしている。

4 方言資料

「ハンガク」は「お転婆」を意味する方言でもある。

方言資料Ⅰ 日本方言大辞典 1989年(小学館)

はながく【板額】1. おてんば。静岡県 香川県三豊郡・伊吹島 《おはながく》静岡県「あの娘はおはながくだ」 富士郡 駿東郡 《おはん》静岡県志太郡 島田市 《おはんさん》静岡県庵原郡 《おはんき》福島県相馬郡 《はながち》香川県伊吹島 《はんかくおなご》島根県瀬摩郡 2. でしゃばり。《はんかん》静岡県「はんかん娘」《おはんき》福島県相馬郡 3. 意地悪女。 4. 浮気な娘。補注 「板額」は越後の国の城九郎資国の娘の名。鎌倉初期の勇婦。

この内容は『日本国語大辞典第二版』と同様である。「お転婆」を表す方言として静岡を中心に使われているようである。また地方出版書には次の記述がある。

方言資料Ⅱ 花と岡部ことば1 1989年 佐藤節郎著(C. A. F&D)

おてんこち笑い

お転婆娘という方言はたくさんあるようですが、志太地区では(おてんこち)、(おきゃん)、(はながく)などといいます。

娘さんの笑い方は、適当にいろけがあって品のある慎ましい笑い方がいいのに、中には所かまわず、品性のかけらもない笑い方、大笑いをする人がいます。いわゆるばかわらいというやつです。男ならどうってことはないのに、女の人がそれもまだうら若い娘がやったんでは縁遠くなるってものです。(焼津市花沢の石川さんが教えてくれました。)

方言資料Ⅰ・Ⅱには国語辞書での一般語「体格がたくましく醜い女をあざけってということば」という意味が記されていない。しかし、インターネットの [homepage](http://www.plaza.across.or.jp/~hariky/village/murago.html) において

方言資料Ⅲ 遠州相良・村語(むらご)辞典

(<http://www.plaza.across.or.jp/~hariky/village/murago.html>)

はながく（板額） hangaku 男勝りの勝ち気な女の子。がさつ者で不器量な娘。越後の国の城資國（じょうすけくに）の娘に板額（はながく）なる者がいて、1190年に甥の資盛が源頼家と戦ったとき、陣頭に立ち、捕虜になっても屈しなかったため、板額は本名ではなく、板のようにおでこが堅かったという意味であろう。上州の嬭天下は有名ですが、山の彼方にはもっと上手がいたんですね。

という記述がみえ、静岡県西部では「不器量な」という意味でも使うという報告はある。

5 考 察

「坂額」と命名された由来については各資料で明示されていないため、さまざまな憶測がそのイメージとともに坂額像を作り上げたものと思われる。ハンガクという音は文献IVで指摘のある「広眉半額」という後漢書からとったものという可能性はある。『吾妻鏡』の執筆者には漢籍の知識があり、⑤「ただし顔色においては、ほとほと陵菌の妾に配すべし」にもそれがうかがえる。外見的特徴として②「童形のごとくに髪を上げしめ」と記されたところから、「額」は強い印象を見る者に与え、「広眉半額」ということばが想起されたかもしれない。また『吾妻鏡』の記事では坂額が奮戦した場所は「越後国鳥坂」である。そのため「半」を「鳥坂」の「坂」に宛て造字したとも考えられるだろう。しかしあくまでも推測の域を出ない。文学作品では「坂」が「板」と表記が改められているが、これは「勇猛怪力」というイメージは「坂」より「板」がふさわしいことからの修正であろう。

もともと「勇猛な美女」であった坂額は、誤解により『大日本史』などに「醜女」とされた。また人形浄瑠璃においては「勇猛」なところから「体格がたくましい」とされ、人形を大きく誂えられた。しかし一方では、「巴板額」ということばも広く使用され、「勇猛な美女」に対しても使われた例もある。

ここで検討すべきことは、「板額」が「体格がたくましく、容貌の醜い女をあざけってということば」という揶揄もしくは悪態表現という一面をもっているにしても、それは辞書記述として適切かどうかということである。

からかい・揶揄・悪態表現は親愛表現の裏返し意識で使用される場合がある。方言資料においては「おはん・おはんさん・おはんがく」のように、人名の一部に「お～さん」をつけることばがみられる。これは、話題親愛語（話題の人物一般について使用される）とも考えられる。お転婆な女の子に対して揶揄したり悪態をついたりすることだけを目的とした言語使用とは考えにくい。むしろ「悪意のないからかい」として使われている場合もある。たとえば、罵倒・悪態表現を利用する「おばかさん」「おちびちゃん」などの語は親愛の情がより深いことを表すのと同様である。童話『くまのプーさん』での「プーのおばかさん」とクリストファー・ロビンが言う呼びかけの表現もそれに該当する。罵倒・悪態表現を始め、相手を卑下する語「おい・おまえ・てやる」なども親愛表現に転用され得る。このような表現形式は、話題の人物に対して尊重や美化することに通じる「麗しさ」と相手の卑下に通じる「無遠慮」の双方向への表現志向が内包されている。話し手が自分の言葉遣いを「粗雑/ぞんざい/横柄/冷淡な感じを与えない」段階のどこに位置づけるか配慮して聞き手に印象付けようとするときに選ばれる表現形式のひとつでもある。「茶/お茶」「水/お水」「酒/お酒」などの表現形式は、個人的レベルでも社会的レベルでも美化語という選択表現の中で使い分けが見られることが多い。しかし、方言における「はながく/おはん/おはんさん」は、美化表

現とは異なり、「親愛・罵倒表現」に近いものと考えられる。

方言に限らず、「板額」ということばを使用するときに、そこには「親愛」の情が含まれているのかいないのか見極める必要がある、もし含まれているとすれば、「罵倒・揶揄・悪態」という一面だけを切り取って辞書に記述するのは適切であるとは言えない。そもそも辞書は規範であり、辞書に定義されたことがすべてであると利用者に伝えてしまう。「板額」を「相手の卑下に通じる表現志向」だけが含まれたものとして実際に使用された用例をみつけないうかがり、国語辞典における一般語としての記述は正しくないといえる。むしろ、「板額」が国語辞書の一般語語釈に示されたことばとして一部の人々に一時期の間だけ人口に膾炙していたとしても、それだけを一般語の語義として示すだけではなく、巴御前と並び称される「巴板額」ということばもあり、容貌の美醜に関わらずに勇猛な女性である形容を表すことばという説明を施す方が適切なのではないか。

む す び

「ハンガク」は歴史上の人物を指す場合には「坂額」と表記すべきであり、一般語として使う場合には「板額」と表記すべきである。さらに一般語の語義は一面的説明だけをするのではなく、「女性が物事にひるまず、堂々と積極的に行動するようす」などのような使用者の感情（親愛／揶揄／悪態など）を含まないニュートラルな記述を施したうえで、「特に体格がたくましく容貌の醜い女をあざけていう場合に使われることもある」という注記するべきではないだろうか。さらに「巴板額」ということばも関連語として示すか、または別に見出し語にすることが望ましいと思われる。

謝 辞

本稿にて漢文解釈を行うにあたり、本学の清宮剛教授に有益なご指導をいただいた。ここに記して感謝いたします。

注 インターネットへのアクセスは2003年8月である。